

# アナストロゾール(アロマターゼ阻害薬)の副作用に対し和漢薬治療が奏効した一例



## 地野 充時 先生

千葉中央メディカルセンター 和漢診療科

- 1995年 富山医科薬科大学 医学部 卒業
- 同 年 同和漢診療学講座 入局
- 1996年 鹿島労災病院 内科
- 1999年 鐘紡記念病院 和漢診療科
- 2001年 富山医科薬科大学附属病院 和漢診療科
- 2005年 千葉大学大学院医学研究院 先端和漢診療学講座
- 2013年 千葉中央メディカルセンター 和漢診療科

### はじめに

演者にとって十全大補湯は、「思い入れのある方剤」であり、多くの症例に処方している。そこで、演者にとって特に印象に残った症例を紹介する。

### 症 例

**症 例**：55歳 女性。

**主 訴**：不正性器出血、両側膝・手関節の関節痛。

**現病歴**：X-2年10月に健診で左乳癌を指摘され、X-1年1月に左乳房全摘術が施行された。その後、同年3月から8月まで術後化学療法が行われ、同年10月からはアナストロゾール(1mg分1内服)による治療が開始されたが、服用後3ヵ月で主訴が出現した。主治医からは同剤の副作用との説明があったのみで、腔粘膜の炎症に対し非ステロイド系外用薬を処方され経過観察となっていた。本剤は5年間にわたり服用を継続する薬剤だが、まだ4年間以上の服用期間を残していることから、和漢薬による治療を希望してX年7月に当科を受診した。

**初診時の症状・所見**：自覚症状は、主訴以外に疲れやすい、手足が冷えて顔がのぼせる、痔がある、関節がこわばる、身体が浮腫みっぽい、手術創の周辺に湿疹がよく出る(右乳癌手術後から)、蕁麻疹がでしやすい、便秘しやすい、

であった。和漢診療学的所見から気血両虚と考え、十全大補湯エキス剤(3包)を処方した(図1)。

**治療経過**：不正性器出血は、十全大補湯服用後約2週間で改善し、1ヵ月後の再診の際にはほぼ消失していた。同年の年末に再発したが、これは帰省の際に10日間の服用中断があったためであり、服用再開後に速やかに症状が改善していることから十全大補湯の効果を実感した。関節痛に対しては附子末(1.5g)を併用し、3gまで漸増したことで症状は消失した。

その後、漢方薬の併用によりアナストロゾール治療の継続が可能となり、副作用もなく5年間の治療を完遂することができ、患者にも非常に喜ばれた(図2)。

図1 初診時の症状・所見

#### 自覚症状

疲れやすい、手足が冷えて顔がのぼせる、痔がある、関節がこわばる、身体が浮腫みっぽい、手術創周辺に湿疹がよく出る(右乳癌手術後から)、蕁麻疹がでしやすい、便秘しやすい

#### 他覚所見

身長：153.5cm 体重：50kg 体温：36.8℃

血圧：106/69mmHg 脈拍：72/分・整

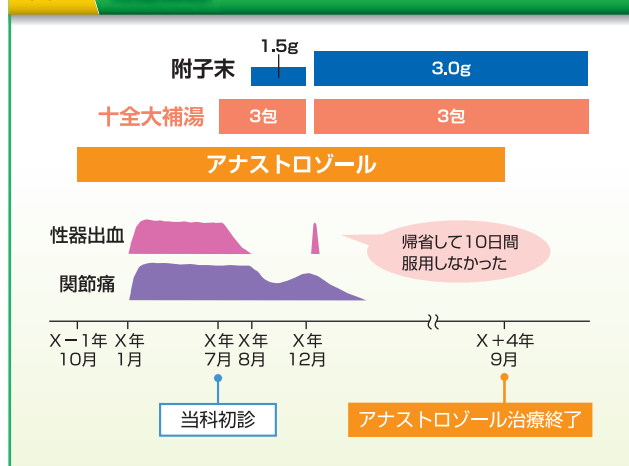
脈候：浮沈中間、虚実中間、緊

舌候：暗赤色、腫大・歯痕あり、白黄苔あり

腹候：  
腹力  
2/V



図2 治療経過



十全大補湯は、病後・術後・慢性疾患などで疲労衰弱している場合で、1) 全身倦怠感、食欲不振、顔色不良、皮膚乾燥、貧血などを伴うことが多い、2) 盗汗、口内乾燥感などを伴う場合、の条件を満たすときに用いる方剤である。演者は、気血水では気血兩虚の病態、陰陽虚実では陰証で虚証の病態であれば、種々の疾患に幅広く用いることができるのではないかと考えている(図3)。

### まとめ

アナストロゾールの副作用である不正性器出血と関節痛に対し、和漢薬治療が奏効した1例を紹介した。本症例に用いたアナストロゾールには種々の副作用が出現することが知られているが、これらに対しては対症療法が行われているのみである。また、先に述べたように5年間の服用が必要であることから、服薬アドヒアランスが問題になる(図4)。

図3 十全大補湯

病後・術後・慢性疾患などで疲労衰弱している場合に用いる。

- 1) 全身倦怠感、食欲不振、顔色不良、皮膚乾燥、貧血などを伴うことが多い
- 2) 盗汗、口内乾燥感などを伴う場合



#### 気血水：気血兩虚

四君子湯と四物湯が含まれている。全身が衰弱し、胃腸が弱く、貧血傾向で、皮膚乾燥を認めるもの。

#### 陰陽虚実：陰証で虚証

重度の気血兩虚では寒証を伴うことが多いため、黄耆・桂枝で温める。

図4 アナストロゾールの副作用対策

- 関節痛 (1.07%)
- 肝機能異常 (0.99%)
- ほてり (0.82%)
- 発疹 (0.5%)
- 高脂血症 (0.40%)
- 性器出血・浮動性めまい・悪心 (0.34%)

(国内臨床試験及び使用成績調査による)

長期の服用(5年)が必要なため副作用は服薬アドヒアランスにおいて問題となるが対症療法で対処しているのが現状である

↓  
和漢薬治療の介入が考えられる領域

本症例のように、証に随和漢薬治療を併用することで副作用が軽減され、QOLを低下させずに治療が完遂できたことは、東西医学の融合という観点からも意義のあることと考えられた。

### Comment

**寺澤：**この症例は、西洋医学と漢方を足すと『1+1=2』ではなく、患者さんにとっては『1+1=∞(無限大)』になるということですね。もし不正性器出血がさらに続いていたら貧血が進んでしまうでしょうし、アナストロゾールの継続服用ができなくなれば、乳癌の再発にもつながります。

この他にも、漢方治療による介入で改善する制癌剤の副作用はありますので、このような症例を多くお持ちの先生方とも知恵を交換しながら、最良の治療を患者さんに提供することが必要です。これこそが私の理念である「和漢診療学」なのです。西洋医学と東洋医学の枠にこだわることではなく、お互いの“いいとこ取り”をして、最高の効果が得られればよいわけです。